中欧研修レポート

城西国際大学国際人文学部国際交流学科
竹田七海

今回の研修では、オーストリア、チェコ、スロバキア、ハンガリーを巡りました。オーストリアでは2日間、チェコでは6日間、スロバキアでは3日間、ハンガリーでは6日間過ごしました。オーストリアでは、ザッハトルテ発祥のカフェザッハに行きました。エリザベートの博物館にも行きたかったのですが時間がなかったのでまた機会があった時に行きたいと思います。チェコでは、マサリク大学ジデック教授の講義、トゥーゲントハット邸、タトラ博物館の見学、マサリク大学日本語科の学生とブルノの観光、音楽会、日本語の授業に参加しました。スロバキアでは、オーストリア、スロバキア、ハンガリーを結ぶ国境にコメニウス大学の学生と行ったり、橋を歩きながら歴史を聞いたりしました。ハンガリーでは、エルテ大学、カーロリー大学の学生との交流、国際交流基金、シナゴーグ、エルテ大学での講義、ホルバート先生の家族の話を聞きました。

今回私が中欧研修に参加したきっかけは、ホルバート先生に誘われたからです。参加した理由としては、中欧ヨーロッパでの学生との交流、ハプスブルク家、ハンガリーでのホルバート先生の話に興味を持ったからです。理由は、高校生の時に見たミュージカルのエリザベートという演目でその主人公に興味を持ったからです。

エリザベートは、ハンガリーオーストリア帝国皇帝、フランツ・ヨーゼフ一世ので、ハプスブルク家の一員です。シシィという愛称で親しまれていました。

彼女の人生について話すと、1837年、エリザベートは南ドイツのバイエルン王国、ヴィッテルスバッハ家の分家マキシミリアン公爵家の次女として産まれました。ヴィッテルスバッハ家とは、ドイツの名門で主にバイエルンを統治していた王家として知られているそうです。エリザベートは少女時代、父親に似て、山登り、馬の遠乗りなどをしていました。エリザベートは、皇后になった後でも少女時代に父親と街に行った時に受け取った硬貨を、「かつて正当に稼いだただ一つのお金よ」と言って持ち続けていました。1853年、エリザベートは、姉のヘレーナがフランツ・ヨーゼフ一世とのお見合いの付き添いとして行きましたが、フランツ・ヨーゼフ一世はエリザベートに一目惚れしてしまい、母であるゾフィー皇太后の反対を押し切りエリザベートに求婚を申し込みました。しかし、エリザベートは自由奔放に育ってきたので宮廷での生活は苦しいものでした。エリザベートは、すべてのことをゾフィー皇太后に決められ、挙句の果てに子供たちの教育は任せられないと無理やり赤ん坊を取り上げてしまいました。とうとうエリザベートは身体が弱くなってしまい、そのことをきっかけにウィーンを離れることになりました。その後追い打ちをかけるかのように、エリザベートの息子、ルドルフが自殺をしました。それ以降、エリザベートは喪服しか身にまとわなくなりました。その後、放浪の旅の途中で訪れたスイス、ジュネーブ

に訪れ船場に向かっていたエリザベートは突然何者かがぶつかり、心臓を貫かれました。彼女の夫フランツ・ヨーゼフ一世は彼女を止めていればと、深く悲しんだそうです。

今回の研修ではエリザベートの博物館には行けませんでしたが、ハプスブルクの背景を理解した上でエリザベートはどのように暮らし、どのような服を着て過ごしていたのかを見てみたいです。

ハンガリーでのホルバート先生の話は、ハプスブルク、ハンガリーについてでした。1866年、ハプスブルクはプロイセン、オーストリアに敗れハンガリーを味方にしなければいけませんでした。エリザベートは、ハンガリー穏健派と協力しオーストリアハンガリー帝国と二重帝国を建設しました。1867年、ハンガリーにはハンガリー語話者は、50パーセントも満たしていなく、多くのスロバキア人がいました。話者を増やすため知識ある移民が必要でした。そのためドイツからユダヤ人の移民を受け入れることにしました。ユダヤ人に声をかけた理由としては、移民政策が有利だったのがユダヤ人だからです、当時ロシアに居住区を持っていたが宗教的な差別や迫害を受けていました。そのため、ハンガリー語を話せば市民権を与えるといった優遇政策で説得しました。当時、ホルバート先生の曽祖父もそのユダヤ人の中にいたそうです。その後、第一次世界大戦にてオーストリアハンガリー帝国は崩壊し、ハンガリーは多くの領地を奪われました。ハンガリーでは領地を奪われたことにより、狭くなり人が溢れました。なので、自国を優先し外国人を追い出そうと考えました。そこで目をつけられたのがユダヤ人でした。1920年当時ユダヤ人はハンガリー国内の人口の6パーセントを占めていました。そこでユダヤ人迫害に対する初の法律が作られました。その6パーセントのユダヤ人は、大学に入れないということでした。

当時ハンガリーはポーランドを除けば、ユダヤ人の数は非常に多くいました。その中には、ユダヤ教信者ではなくハンガリー人を目指している人も多くいました。ホルティは当時のハンガリーで偉い人でした。ホルティの両親はナチス党員でしたが、彼自身はユダヤ人の虐殺には反対していました。そういったこともあり、ハンガリー国内では、ユダヤ人は迫害を受けていたが虐殺はされていませんでした。この時、ハンガリー国内のユダヤ人はまだ強制収容所に送られていませんでした。

第二次世界大戦時、ハンガリーはドイツと同盟国であったが、勝ち目がないと感じ連合国に声をかけたが、そのことをドイツに知られ、ソ連に攻められ危機だったドイツは、裏切ろうとしていたハンガリーを攻め、征服しました。そしてホルティはハンガリーでの力を失ってしまい、ハンガリーはドイツに完全に支配されてしまいました。そして、ナチス・ドイツはユダヤ人を一つの狭い場所に隔離しました。衛生環境が悪く亡くなってしまう人もいました。これが、ハンガリーでのホロコーストが始まりました。ハンガリーはユダヤ人をアウシュビッツに送った最後の国でした。1944年、ハンガリーから強制収容所に送られた犠牲者は約40万人いました。

ハンガリー初日に私たちは、ドナウ川の靴を見て一部のユダヤ人はドナウの淵に立たされ、射殺されたということを聞きました。ホルバート先生の話を聞き、背景にこういうこ

とがあったということを知りました。

今回の研修では、学生と交流する機会がたくさんありました。学生と交流していて、自分自身のことで二つ気づいたことがありました。

一つは、学生と交流していて話しをしているときに相手がわからない言葉があってそれを説明しようとしたけれどわからなくて人に頼ってしまい、自分で解決できませんでした。具体的に、ハンガリーの学生と話している時に、私は人見知りと言いましたが相手は意味を知らなかったようで尋ねられましたが、どう説明すれば良いのか分からず近くにいた友人に頼ってしまいました。高校生の時にも同じようなことがあり、外国の学生と交流する機会があり、わからない言葉を教えて欲しいと言われましたがこの時も説明が出来ず人に頼ってしまいました。原因として、自分自身の知識のなさ、知り合い、周りに助けてくれる人がいるとどうしても頼ってしまう癖があるからです。解決策としては、現地の言葉だけでなく、日本語でも自分自身の知識量を増やし、説明する練習が必要だと感じます。その他に周りに知り合い、助けてくれる人がいない状況で自分がどれ程出来るのかを理解したうえで、単身で外国の学生と交流することが必要だと感じました。

もう一つは、他言語を学ぶ際、自分自身は机に向かって文法からやるのではなく、自分の興味を持ったことについて話しながら「これはその言語で何て言うの？」と聞きながら教えてもらう方が記憶に残っていました。例えば、チェコの学生とブルノの街を観光している際に、気になるものを見つけた際に「これはなんていうの？」と質問をし、実際にその聞いた言葉を入れるとどのような文になるのかと、自分の勉強にもなり、相手との会話のきっかけになるので一石二鳥だと思いました。なので、今後も学生と交流をし自分の知識量を増やしたいと思います。

今回の研修を終えて、ホルバート先生のハプスブルクについての話を聞き、エリザベートの背景について知り、さらに知識量を増やしてエリザベートについてもっと知りたいと思いました。さらに、今まであまり知らなかった事を体験することは、日常のなかで、なかなかに難しく新鮮に感じることが少ないかもしれませんが、新しい事を恐れず、まずは素直に受け入れてみるこのような体験ができて本当によかったと思います。私はこの研修が少なからず自分の将来選択の際に役に立つと思っています。

＜参考文献リスト＞

http://www002.upp.so-net.ne.jp/masuemon/link/austria/sissi1.html　（2019/5/30）
https://wondertrip.jp/100583/3/　（2019/5/30）
https://asagaku.com/chugaku/topnews/5628.html　（2019/5/30）